

# 南方（フィリピン）

自決を考えた

比島航空特別整備隊員

兵庫県 前川 保

三重県名賀郡矢持村字諸木（現在の青山町）で生まれました。家は農業で私は長男で、他は姉妹でした。矢持実業公民学校という農業の学校に入校したのは、農家の長男ですから、自然とそういう途を選んだのでしよう。しかし、実際は昭和十四年から十六年八月まで、兵庫県伊丹の隣、久城町の大砲機工という砲兵工廠の下請会社に勤務したのです。

軍隊は昭和十六年徴集兵で、私の技術を生かすよう

になったためか、航空整備兵として太刀洗航空本廠入隊のため（昭和十六年九月一日）伊丹の隣町から出発、九月二日門司港出発となり、入営者一同は集合場所へ、家に帰れないために着ていた国民服を脱ぎ、禪一本で他の者は家の者に渡しました。軍服を着、満州へ行くので支給された犬の毛皮の付いている防寒外套。防寒服や手袋は大きな袋に入れて持つ。同年兵は兵庫、岡山、鳥取県の人たちでした。

九月三日、「津山丸」乗船、門司港出航、玄界灘を渡り釜山港へ上陸。貨車で平壤駅へ到着し教育隊に入営です。九月五日から航空兵となるのですが、まず一般兵科の訓練を半年間、一期の検閲が終わり、その時に改めて関東軍の航空隊要員となり、平壤の第八野戦航空修理廠第一中隊へ入隊です。同年兵は二百五十名

が八個班に分かれました。

ここでも、一般兵科教育、分隊教練から中隊教練まで、毎日毎日が初年兵ばかりの教育で、随分厳しく鍛えられました。昭和十八年三月末日、通算六カ月間の教育期間が終わり、各隊に配属、転属がありました。

私は第二選抜の上等兵となり、整備兵として満州牡丹江省の海浪の分廠に入り飛行機の整備や戦闘訓練の毎日でした。

そのとき、昭和十四年徴集の兵長（私より二年先輩）が墜落した飛行機にぶつかり、腹を切られ即死という事故がありました。そのとき、私は兵長の屍衛兵に立哨しましたが、もし、その場に私がいれば私が死んでいる。人間の運命は分からねぬものだとつくづく思いながらの衛兵勤務で、その時のことは今でも忘れられません。

九月、関東軍航空隊の移動があり、私は飛行機の整備のみだったので転属はしませんでした。しかし、十月勃利県勃利の飛行場に派遣されました。九月でも零下二、三〇度にもなる酷寒の地でした。私の勤務場所

は格納庫で、ソ連のミグ戦闘機が二機置いてあり、ミグの射手の座席は回るようになっていて、操縦士の後にある複座式でした。私は日本の飛行機の準ぐらいいか知らないのです、こんな飛行機に来られたら隼も危ないと思いました。

昭和十九年一月一日、関東軍航空部隊総合演習があり、関東軍航空総監司令部より冬季演習の命がありました。一月二日～一月三十日まで、冬季大演習のため外出及び入浴などは一斉禁止の命令でありました。

私は整備員でしたが、機関銃の装填手として飛行機に乗り、吹き流しを撃つ教育を受けました。先に申したとおり、一カ月入浴禁止のため衣類の縫い目には虱が数珠つなぎになっているので、かゆくて苦しみました。

大演習が終わると、私は特定な航空機の専門整備係となり、第八十六戦隊専属整備兵となりました。大気が零下三〇度くらいで飛行機のプロペラが三千回転すると零下三五度となる。飛行機を動かさないため尾翼の上に跨っている。プロペラが回転すると、温度がど

んどん下がる。つなぎの作業服に防寒帽を被っている。毎日それが仕事ですから、寒いのを通り越した気温の中で凍傷にならぬため、物を叩いて手に力を入れて血を通わせるため、しょっちゅうその動作をしていなければなりません。寒さに負けてそれをしないと、痛いと感じるようにしていなければ凍傷になる。すると第一関節から切断しなければならぬ。指先が黄色くなっではもう遅い。凍傷にならぬため、しょっちゅう痛みを感じるようにしているのです。

満州では朝六時ごろ起床し、天突運動をする。その習慣は今でも続き、私は四時に起き実行しています。それが自分に与えられた任務と想っている。人がやらぬことをやれ、と先生から言われているから実行している。

昭和十九年二月、千葉県松戸航空隊に配属を命ぜられた。松戸で兵器（飛行機）整備、満州と南方とでは気候、気温など条件が異なるので教育されたのです。その時は何故教育を受けるため内地へ配属されたのか、満州と内地と併合部隊として編成されるのか分からな

かったのです。しかし、結局南方要員であることがだんだんと分かってきました。

半袖衣類を渡され、二七五名が特別移動修理班整備員とし、昭和十九年四月上旬、比島方面派遣軍編成のため転属となったのでした。昭和十九年三、四月になると日本の状況が変わったことは戦後私どもにも分かりました。広島港で二十隻の船団を組んだと聞いています。船の中では飯盒一杯の水の半分で食器洗い、残りの半分で洗面をと教育されました。下関からフィリピンまで十四日間、一日の水使用範囲は飯盒一杯と決められました。台湾を出ると雷撃されるから、空砲の魚雷を撃ち、この十倍の振動があることも教育されました。船団の中で病人が出て、大分弱った人もいたが、上陸は一緒に、マニラ港の大統領の城に二千人が入って一時駐屯しました。

そして、マニラ航空隊と合併することが航空軍司令官から命令が出て、クラーク飛行場を拠点としました。そのとき、クラーク飛行場には飛行機が多くあり、マングローの木の下に陸軍の飛行機が格納されていて、我々

はそこで整備をしていました。そのうちに米軍のグラマン戦闘機が空襲してきました。しかし応戦できないので、イロイロ飛行場へ移動しました。

この島でもマンゴーの木の下に飛行場を偽装して格納しました。そのとき、戦闘機六機とたまには軽爆撃機が来ることもありました。私はそこでも機銃の照準を合わせるため、操縦士の後に乗ったり、操縦桿のワイヤーの調整などをしていたのです。移動修理班はいつでも飛行機が出せるように整備していました。二七五名の修理班は陸軍の指名された兵隊だから、飛行場に固定しない。分隊長はベテランの准尉でした。これによって南方軍各島の航空機配置整備はできたのです。

昭和二十年一月、フィリピン方面各航空隊の合併演習が行われましたが、このころから、グラマンの来襲が多くなる、と内地から通信があった。機体は太陽を背に光る。我々も銃撃されましたが兵隊に損害はなく、現地人の犬や豚はやられました。飛行場の滑走路以外の地形は凸凹があり、凹所に退避していました。二七五名の隊員はここでも一緒にいました。

二月下旬には、先に申したイロイロ島で飛行機の整備兵として働いていましたが、この島は小さいので困り、もっといろいろな整備作業をするにはとても無理で、いつまでもこの島で駐屯しているのは、現役当時から鍛えられた元気ある働きができない。そこで、思い切って中隊長に要望事項を出し（意見具申）、次の他の島に転進と願ったのです。

日本の輸送船団は連合軍の空爆、潜水艦の雷撃で大損害を受け、内地からの輸送は停止状態であると聞かされたので、私たちが北満で鍛えた成果を挙げるため突撃隊の整備が望まれることだと思ったのです。

昭和二十年三月上旬に、比島方面派遣隊命令が発令されましたから、ネグロス島へ進出です。私たちはもっと早くから転進していたら特別移動修理中隊の状況も変化していたかも知れません。何しろ周囲の島々の状況は全く分からない。しかし米軍の航空母艦に対し、日本航空隊の特別攻撃隊が日夜活動している情報はありました。

レイテ島攻撃も米艦隊に対する特攻も全く驚くばか

りの厳しい戦いとなり、毎日のように各飛行機は昼夜の別なく激しい出動でした。例えば戦闘機の活躍も、海上への対空警戒も一分一秒の差が勝敗を左右するのです。この比島上空の激戦こそ世界に比類ない空中戦です。また、私たちがネグロス島に転進と同時に米航空母艦からの攻撃が、ネグロス・レイテ島へと激しくなりました。私たちはこの戦いに応じ、一瞬の休みもなく整備することが課せられた任務でした。

昭和二十年四月上旬、私たち航空整備隊も日一日とて永久に忘れられない活動をし、整備兵は重要な任務を負っていたのだと、今でも想い出となっています。ある時は米軍超爆撃機B29の空襲で飛行場へ爆弾を投下する。早朝受けた大きな弾穴は直径二〜三〇メートルくらいあるが、航空隊の若い兵隊の活躍でわずかの時間で埋める。我が航空隊の戦闘機の離着陸に支障がないように修理するのです。これも命令一下作業を終わります。このような事が次から次へと起こるのが戦地の常です。何と言っても心の弛みが油断大敵で、どんなことも決死隊的動作で毎日が成り立っていました。

後日の早朝、無線を傍受しました。「日本の飛行機を当飛行場に送迎されたし」との情報でした。間もなく、東方上空に太陽を背にした何か光る黒点が二〇点三〇点と眼に映った瞬間、敵のグラマン機三〇機ほどが現れたのです。全くの一瞬の出来事でした。この飛行場は先に申したように凸凹の畑の付近に滑走路一本のみですから本当に幸いでした。我々は凹部に退避したため負傷者は一人もありませんでした。この無線を傍受したとき、音声も少し変わっている様子でしたので、これは米軍の偽電だったのでしょうか。そのとき、敵機の飛来までわずか一〜二分くらいで、万一退避が遅れたら幾人かの犠牲者を出したことでしょう。本当に中隊全体の迅速な行動が、いざという時の危機を救ったと思います。あの時こそは、本当に良かったと男泣きの喜びを感じました。

それから後も、あの一瞬をいつまでも忘れず、毎日の飛行場での整備に励みましたが、近いうちにこの飛行場を捨ててジャングルの山中に転進する時期もいよいよ迫ってくると思っていました。

四月下旬、私たちは一番大切な食糧も確保しておかねばならないことと、自分の体はまず自分で気を付けて命を大切にせよとの情報もありました。隊は航空司令部よりの命令により、ネグロス島のジャングルに転進することになりました。ジャングルの山の中には変わった樹木があるが、太陽の光線を受けられないので主食たる食糧などが欠乏し栄養失調になるから、野菜を採集することが重要な仕事になりました。

あるとき、飛行場の格納倉庫から食糧が発見されました。その一部は玄米もあるが他はほとんど粃であるとの話です。元気な兵は野原に出て多くの野菜を採集し中隊の副食とする。残った物は、粃を鉄兜に二合ばかり入れて搗くのです。これがジャングルでの仕事でした。それからは粃を搗くことが毎日の日課になったのです。これらを振り返ってみると、比島の島での活動は全く思いも及ばぬジャングル山中の寂しい日の連続でした。

比島ではレイテ、ルソンと米軍が上陸し、日本軍は今申したように、全員が人命尊重の意味で山中に入り、

ジャングル生活をするよう、山下方面軍司令官からの命令が出されたようで、マニラも大空襲があり、グラマン、B 29の空襲は激しく、日本軍はそれぞれの島で山中に転進自活するより仕方ありませんでした。

ネグロス島に移動する前のボホール島にはパイナッブルが沢山あり、それを飛行機や自動車で他の部隊へ送って喜ばれたこともありましたが、今はネグロス島で、その日その日の食糧を確保する日課となっていました。

しかし、私は元気でしたので、各島に隠してあった食糧などを特攻隊式に取りに行きました。しかし、米軍やゲリラがいるので出発するときには水盃です。歩いて行くとき、ゲリラの電波探知器にかからぬよう、なるべく見つからぬよう行動しなければならぬから、五人が一組となり銃を持って軽装（食糧を取りに行くのですから）で行く。五人で一個中隊の食糧を取りに行くのです。

ジャングルの中の野菜の葉の裏面には害虫の赤虫がとまっていることなど知りませんでしたから、初めの

うちは手や足に止まっているのを針を取り除いておりました。しかし、ジャングルの山中は昼間でも薄暗い、従ってジャングルの中では小さい赤虫も思ったようには取り除けません。

私は知らぬうちに、その赤虫が耳の孔に入ってしまった取り除くことができず、そのうち体が思うようにならなくなった。赤虫ぐらゐと安閑としていたが、耳に入った赤虫の毒が日が立つに従って悪化して、いつの間にか耳が聞こえなくなるようなこともあり、そのうちに耳の中から耳尿が流れ出し、その患臭で戦友たちも近寄ってくれないので、自分でも寂しい思いをするようになったのです。

そのうちに中隊の戦友が中隊の上司に伝えたのか、臭いもひどくなった。またジャングルの中では何の仕事もできない。特に病魔に追われての聲同様になり、私も戦友とは別の小屋に移るよう、手話で伝えられたときこそ、全く残念で残念で、悪魔に追いやられたように本当に寂しかったのです。しかし、この状態で自分が弱っていったらどうなるのか、と思ったが、よく

考えれば種々の方法も思いつきました。

軍医にお願いしたことは、「自分のことは自分で行動するために、初年兵当時教えられた匍匐前進の姿勢で行動する方法」についてでありました。米軍が攻めて来る時期も緊迫した時期でありましたので、まずお頼みした砂糖袋を四袋もらって、足には膝に二袋巻き付け、腕には二袋の袋を巻き付けて匍匐前進すれば、全く敵からは見つからないということでした。

中隊や皆が出発するとか行動することが分れば少し前に自分が出発する。犬や猫のように野たれ死にすればこれも運命であるが、運命は決まったものではないのだと、心のうちに決心しました。

いよいよ出発のとき、同一行動とれぬ者の自決は暗黙の間に覚悟しなければならぬ。昭和二十年八月中旬の日に、中隊が出発する二時間先に出発して合流地点は街がよいということです。私自身は匍匐前進の低い姿勢ですから見つかることはないと思い、野原の方向に出ました。すると三、四百メートルくらい行くと後の方で何かの音がしたように思いましたが、これは

後から来た二人の兵の自決の音ではないかと思いましたが、私も、もし後まで残っていたら同じように南国で骨を埋めたのだと思うと、涙が湧き出るように流れました。遠い他国で花と散った同期の戦友のことを思うと、その寂しさは筆や言葉では言い表しようありません。

それからまた、五百メートルほど離れた地点で、私は米軍のMPに捕らえられジープに乗せられました。走り出して着いた所が米軍の病院でした。私は耳も聞こえない、何も分からない。そのままの姿でその病院に入院させられました。それから二カ月間病院の治療で全治することができました。この喜びは言い表すことのできないものでした。

再度、「日本国捕虜収容所」へ戻りました。その時の通訳が花柳寿美様だと後で聞かされましたが、五十三年前にお世話になった方にお礼も申しておりません。その後、私も元気になり、キャンプ内では、私は進んで各島々への使役に船に乗って出かけ、島々の復興の使役を果たすことができました。この喜びを私は現

在も持ち続けております。

その後、復員船「氷川丸」に乗船、比島の港から約十四日間、バシー海峡を経て名古屋に無事上陸できました。三菱飛行機工場内でDDTで体を消毒され、復員証明書と二枚の衣類をもらって、兵庫県伊丹の町へ無事帰りました。復員の日は、昭和二十一年十二月十三日でありました。

## 死闘の「鉄」

兵庫県 笹倉宏夫

私は昭和十五年徴集で徴兵検査で甲種合格でした。と同時に股肱の臣として青春の血が燃え溢れました。昭和十六年現役兵として姫路の部隊に入隊し、初歩教育と外地出征のために注射等を行い（三種混合）、二月二十日出陣で姫路駅頭へと歩武堂々と行進、乗車後は窓を閉じて外を見ることもできず、ただ君が代の曲が駅構内に流れていて、汽笛一声で発車しました。